節構造の普遍性——「が／の交換」分析

山橋 幸子

1. はじめに

世界には3000とも5000ともいわれる言語があるが、それぞれ異なった独自の言語体系を持っているということは、具体的なレベルの単語に限らずより抽象的なレベルの文法に至るまで、外国語学習等を通して誰もが体験する事である。しかし一方で、世界中のあらゆる言語に共通すると考えられている特徴、つまり言語の普遍的特徴もある。この言語の普遍性(universal)の研究に主眼を置く、原理とパラミターのアプローチ(Principles-and-Parameters Approach)と呼ばれる変形文法（Chomsky, 1981, 1992）は、様々な言語の分析に適用されている現代の文法理論を代表するものであるが、この理論の根底に流れるある一つの仮説がある。文／節の基本的構造は述語の持つ意味特性によって決定される、ということである。しかしながら、この考えは本当に世界中の言語に共通するのであろうか。本稿は、言語の普遍性と考えられているこの仮説が少なくとも日本語には当てはまらない事を、「が／の交換」と呼ばれている現象を基に、この仮説に疑問を投げかける。いわゆる埋め込み文の場合、述語の要求する意味役割を担う名詞句が同じ節内に常に現れるとは限らず、従って、述語の意味特性が節の構造を決定するとは言い切れない事を示す。

本稿の構成は、次の通りである。セクション２で普遍的特徴と考えられている節の構造に対する仮説について簡単に述べ、セクション３で「が／の交換」現象に関わる「の」という助詞を伴う名詞句の意味的役割と文法的役割を分析し、この現象が節構造の普遍性と

されている考えと矛盾することを示す。この問題は、変形文法のフレームワークでは「移動」という変形規則を適用したり、「ゼロ代名詞」を設けることによって説明されているが、しかし理論的に問題があり解決にいたらない事をセクション4で示す。セクション5は、今後の課題を述べ本稿を締めくくる。

2．普遍性としての節の構造

初めに、言語の普遍的特徴とされている節の構造に対する仮説とその背後にある考えについて述べる。

動詞によって代表される述語は、語彙的意味情報として各々基本的にどのような意味役割を担う名詞句と共起するかが決まっている。例えば「殴る」という動詞は、その意味的特性上、(殴るという動作の)動作主を担う名詞句と(殴られる)対象を担う名詞句が共起する事を要求する。（どの動詞とも共起する付帯的情報と考えられる場所や時間を表わす名詞句などは、各々の動詞の意味特性からはずす。）つまり私たちが直感的に分かるように、「殴る」は「動作主」と「対象」という意味役割を担う二つの名詞句を要求する。この動詞の意味的特性が節の基本的構造を決定するという仮説は、更に「殴る」という動詞と共起する意味役割を担う名詞が「殴る」の現れる同じ節内に現れるという仮説に基づいている。これをRiemsdijk and Williams (1986、p．242) は、「動詞と意味役割を担う名詞の関係は非常にローカルで、例えば、下の（1）において節1に現れる名詞句も節3に現れる名詞句も節2に現れる動詞の意味役割を担う名詞句とはなりえない」と述べている。

(1) [NP . . . [. . . V [NP . . .] . . .]]
CL1 CL2 CL3

(NPは名詞句、Vは動詞、CLは節，[ ]は節の境界を表わす。)

この考え方は一見ごく当たり前の常識的な事のように思われる。例

えば、行為主「殴った人」が「太郎」で、対象「殴られた人」が「次郎」なら、これら二つの意味役割をもつ名詞句は「殴った」という動詞の現れる節内に現れる。従って、

(2) [　私は　[　太郎が 次郎を 殴った] のを 見た]
　　ＣＬ１　　ＣＬ２

というように「太郎」も「次郎」も「殴る」の現れる節ＣＬ２内に現れている（２）は良い文として許容される。しかし、次の場合は、どうだろうか。

(3)＊ [　太郎が 私は [　次郎を　殴った] のを 見た]
　　ＣＬ１　　ＣＬ２
（＊は、許容文でないことを表わす。）

(3)はどうも座りが悪く、良い文とは言い難い。行為主「太郎」が動詞「殴った」の現れる節ＣＬ２に現れていない事が原因と思われる。しかし動詞と意味役割を担う名詞句が、このようにどんな場合にも同じ節内に起こるとは限らない。

３．１．　「が／の交換」

日本語には、「が／の交換」と呼ばれる現象がある。主節においては、行為主や経験者等を表わす主語と呼ばれている名詞に「が」という助詞は付くが、「の」という助詞は付かない。従って、下記のように「生まれた」の経験者を表わす「健」に「が」の付いた（４ａ）は許容文であるが、「の」の付いた（４ｂ）は許容文ではない。

(4) a　健が 生まれた　　b＊健の 生まれた

しかし、下に示したように関係節や複合名詞句等のいわゆる埋め込み文においては、「が」も「の」も可能である。

(5) a 健が 生まれた 家　　b 健の 生まれた 家
(6) a 隆が 太っているのは 親譲りだ
　b 隆の 太っているのは 親譲りだ

例文(5)において、(5 a) の「健が」も (5 b) の「健の」も同様に「生まれた」の経験者と意味解釈される。また(6)において, (6 a) の「隆が」も (6 b) の「隆の」も同様に「太っている」の経験者と意味解釈される。「が／の交換」とはこのように意味を変えず「が」と「の」の交換が可能な現象をさして言う。この「が／の交換」現象における「が」の付いた名詞句 (「が—名詞句」) の場合は節構造の普遍性の考えと一致するが、「の」の付いた名詞句 (「の—名詞句」) の場合には、問題が生じることを以下に示す。

3. 2. 「が—名詞句」と普遍性

初めに「が—名詞句」の場合は、言語の普遍性に問題がない事をみる。例えば、例文 (5 a) の「健が」は、「生まれた」の経験者という意味役割をもつが、同時に主格を表わす助詞「が」を伴い、述語「生まれた」の主語として文法的関係を持つ。従って「生まれた」とともに節を構成し、動詞と同じ節に共起している。同様のことが例文 (6 a) にも言え、(5 a)、(6 a) の構造はそれぞれ(7)、(8)のように表わされる。

(7) [　　[　　健が 生まれた] 家]
　NP　CL

(8) [　　[　　隆が 太っている] のは]　親譲りだ
　NP　CL

このように、「が－名詞句」の場合は、動詞の意味情報が節の構

造を決めるという考え方の典型的な例である。しかし、「の－名詞句」の場合はどうであろうか。（５ｂ）の「健の」も（６ｂ）の「隆の」も動詞と意味関係はあるが、動詞の主語としての文法的関係は持たないことを次のセクションで述べる。

３．　３．「の－名詞句」の文法的機能

「の－名詞句」の文法的機能の分析は、「の」の分析により、二つに分かれる。一般的に「の—名詞句」が意味的に「が—名詞句」と同じである事を根拠に、「の」も主格の助詞とする立場が多いが、伝統文法の松下大三郎(1930)のように、名詞（＝体言）を修飾する属格（＝連体格、所有格）の助詞とする立場もある。最近の変形文法理論も、主格とする立場と属格とする立場に分かれる。もし「の」が主格なら、「の－名詞句」の場合も「が－名詞句」同様主語であり、(9)に示すような構造を持つことになる。

(9) [　　[　　健の 生まれた] 家]
　　ＮＰ　ＣＬ

しかし属格なら、(9)のような構造を持たない。「の」が属格ということは、例えば、「が／の交換」に関わる下の（１１ｂ）の「の」が、(10)の「の」と同じ助詞であることを意味する。

(10)　月の 頃
(11)　ａ 月が 出る 頃　　ｂ 月の 出る 頃

（11ｂ）の「月の」は(10)の 「月の」と同様、文法的に「頃」の修飾語であり、「出る」と文法的関係はない。つまり「月の」は「出る」と意味的関係を持つにもかかわらず、「出る」と同じ節に現れず、構造は次のようである。

⑿ [　　[月の]　[　　出る] 頃]
　　ＮＰ　　ＣＬ

同様に、（５ｂ）の構造も下の（１３）のようになる。

⒀ [　　[健の]　[　　生まれた] 家]
　　ＮＰ　　ＣＬ

このセクションの目的は、「が／の交換」の「の－名詞句」がまさにこの構造を持つこと、つまり「の」が主格ではなく属格の助詞であり、「の－名詞句」は連体修飾語であることを示すことにある。

初めに、「の」を主格とするには「が」と違う現象が多すぎる。第一にセクション３．１．の例文（４ｂ）でも見たように、主節において主語の位置に「の」が決して現れることがない。この他に「の－名詞句」が、「が－名詞句」と音韻上も統語上も異なる様々な現象がある。Handerson（１９４８）の指摘にもあるように、「の—名詞句」と動詞の結びつきの方が、「が—名詞句」と動詞の結びつきより音韻上緩い。従って、例えば、下の「健が」と「生まれた」の間にポーズを入れると不自然になるが、「健の」と「生まれた」の間にポーズを入れても不自然ではない。

⒁　ａ？ 健が（ポーズ）生まれた 家
　　ｂ 健の（ポーズ）生まれた 家

次に、日本語は述語が文末に来てさえいれば、主語を含む節の他の構成要素は、語順の入れ替えが自由であるという統語的特徴を持つ。従って、下記の例文⒂　ａの埋め込み文の主語「明子が」と目的語「学校を」の語順を入れ替えて⒂　ｂのようにしても非文にならない。

(15) a [[明子が 学校を 休んだ] 理由は] 何ですか
b [[学校を 明子が 休んだ] 理由は] 何ですか

しかし、「の－名詞句」の場合には、下記に示すように不可能である。

(16) a [明子の 学校を 休んだ 理由は] 何ですか
b ？？ [学校を 明子の 休んだ 理由は] 何ですか

(16) a はいいが、(16) bはよい文とは言い難い。「明子の」が「休んだ」の主語なら、何故「休んだ」の目的語「学校を」と語順交換できないのか説明がつかない。

更に、「が／の交換」はいつでも可能というわけではなく、牧野(1980)によると、「の－名詞句」と動詞の間にある語が多ければ多いほど「が／の 交換」は起こり難い。従って、

(17) a 太郎は 花子の おととし 書いた 論文に 目を 通した
b ？太郎は 花子の おととし アメリカで 書いた 論文に 目を通した
c ？？太郎は 花子の おととし アメリカの イリノイ大学で 書いた 論文に 目を 通した
d ＊ 太郎は 花子の おととし アメリカの イリノイ大学で 言語学博士号の 為に 書いた 論文に 目を 通した
（牧野 １９８０：１８３）

(17)は「花子の」と「書いた」の間にある語が多ければ多いほど、許容度が低くなることを示す。しかし主格の「が」を持つ「花子が」の場合は、下に示すように（１７ｂ）のような場合でさえも問題はない。

⑱太郎は 花子が おととし アメリカの イリノイ大学で 言語学博士号の 為に 書いた 論文に 目を 通した

この事実も「花子の」が、主語である「花子が」とは違うことを示す。

以上が「の一名詞句」と「が一名詞句」との違いであるが、更に「の」を主格とした場合に起こる問題がある。井上(１９７６)にもあるように、「の一名詞句」は主語とだけ入れ替わるわけではなく、下の例文が示すように意味的役割が「対象」で一般に目的語とされる名詞句とも入れ替わる。

⑲ 切符の お持ちで ない 方 いらっしゃいませんか
⑳ 芋の 煮たのが ある

例文⑲の「切符の」は 動詞「お持ち」の対象としての意味的役割を持ち、かつ対格(目的格)を伴う「切符を」と入れ替えることも可能である。同様に⑳の「芋の」は 「煮た」の対象である。「の」を主格とするのと同じ立場に立って考えるなら、⑲、⑳の「の」は対格の助詞ということになり、文法上、混乱が生じる。以上、「の」を主格の助詞とし「の一名詞句」を文法的に主語とすることが妥当でないことを述べた。では、「の」が属格の助詞、つまり「の一名詞句」が連体修飾語であるという直接の根拠は何だろうか。

日本語の場合、連体修飾語の一種である限定詞（＝連体詞）が、下に示すような典型的な属格を含む連体修飾語の後に起こる。

㉑ a 私の 本　　b 私の あの 本
㉒ a 桜の 季節　　b 桜の この 季節

㉑ では、連体修飾語「私の」の後に限定詞「あの」が起こり、㉒では「桜の」の後に「この」が起こっている。この現象は、「が一名詞句」の後では起こり得ないが、「の一名詞句」の後では可能である。従っ

て、

(23) a ＊ 隆が あの 太っている のは 親譲りだ
　　 b 　 隆の あの 太っている のは 親譲りだ
(24) a ＊ 健が その 生まれた 家を 見に行こう
　　 b 　 健の その 生まれた 家を 見に行こう

(23a)は「隆が」の後に限定詞「あの」は起こらないことを示す。(23b)は(21)、(22)の連体修飾語の場合と同様、「隆の」の後に「あの」が起こることを示す。(24)についても、「健が」の後では許容されない限定詞が「健の」の後では許容されることが示されている。この事実が「の－名詞句」が連体修飾語であること、つまり「の」が属格の助詞であることを、決定的に示している。

このように、「が／の交換」に関わる「の」を属格の「の」とするということは、音声上同一の「の」を統一してみる結果となり、より簡潔な文法に繋がる。しかしこれは、「の－名詞句」が連体修飾語であることを意味し、「健の生まれた家」の構造が前述した(9)ではなく(13)のようになることを意味する。

(9) [　　[　　健の 生まれた] 家]
　　NP　 CL

(13) [　　[健の] [　　生まれた] 家]
　　NP　　　　CL

つまり、「健の」は、動詞と意味的関係があるにもかかわらず動詞の現れる節に現れていず、節構造の普遍性の考えと矛盾する。

4. 原理とパラミターのアプローチ

「が／の交換」現象は、Chomskyによって紹介された原理とパラ

ミターのアプローチと呼ばれる変形文法理論家の関心もひき、これまで様々な提案がなされてきた。ここでは、「の」を主格とする立場の分析はとり上げず、本稿と同じ立場の「の」を属格とし、意味と文法機能の不一致の問題を扱った分析のみをとり上げる。この立場も更に大きく二つに分かれるが、代表的なものだけをごく簡単に述べ、これらが解決に至らない事を示す。(尚用語も、提案者の意図を変えない範囲においてごく一般的なものを使う。)

「の」を属格とする立場には、Fukui & Nishigauchi (1992)、三原 (1994) 等があるが、最初にこれらの想定する原理とパラミターのアプローチと呼ばれる文法理論について、本稿の目的に直接関係のある事を簡単に記す。この理論は、普遍文法の観点から人間言語を統一的に説明することを目的にしているが、言語には私たちが実際に聞く音声の現れる表層レベルの他に、語彙項目の意味的特性に忠実な最も基本的な文の形態 (深層的な構造＝D構造) の現れるレベルと、これに変形規則が適用されて派生する表層的な構造(S構造)の現れるレベルを想定する。D構造では述語の意味役割が適当な名詞句に付与され、S構造では名詞句に格が付与される。変形規則が適用されない場合は、D構造とS構造は同じである。変形規則は、α移動(move α)と呼ばれる規則だけで、格を付与されない名詞句が格を得る為に適当な位置に移動するものであるが、この移動によって空になった名詞句の基の位置に同一指標を持つ痕跡 (e) を残しD構造を保持するようになっている。変形規則は、様々な制約の下に適用され、その適用は最後の手段とされている。この文法は、また音形を伴わないゼロ代名詞 (pro) も設定し、語彙項目の意味役割を担う名詞句の存在を想定している。

この理論の下で提案された「の」を属格とする立場には、「が／の交換」の呈する意味と文法機能の不一致を「移動」に帰するもの(Fukui & Nishigauchi)と、「ゼロ代名詞」に帰するもの(三原)とがある。詳細な理論的メカニズムを省いてポイントのみを述べると、「移動」分析の場合、例えば「健の生まれた家」の深層的なD構造は、

概略下の(25)のようになり、表層的なＳ構造は(26)のようになる。

(25) [　　[　　健　生まれた] 家]
　　ＮＰ　　ＣＬ

(26) [　　[健の]　[　　e　生まれた] 家]
　　ＮＰ　　i　　ＣＬ　　i

((26)のｅは「健の」の痕跡を示し、――――> は移動を示し、ｉは「健の」とｅが同一の対象物を指す指標を示す。)

(25)のＤ構造で、［健］は［生まれた］と同じ節内に共起し、動詞の経験者として意味役割を付与される。この意味役割を担った［健］は変形規則の適用を受け元の位置に痕跡（ｅ）を残しながら、属格を受けるために節の外の連体修飾語の位置に移動する。こうして派生した構造が(26)の表層的なＳ構造である。このように移動という手段を用いて、「健の」が表層では属格を持っていながらも、深層においては［生まれた］の意味役割を付与され同じ節に起こっていることを示している。

「ゼロ代名詞」分析の場合、変形規則の適用は受けないので、Ｓ構造の名詞句に属格の「の」が付与されている事を除いては、Ｄ構造もＳ構造も同じで、概略次のようである。

(27) [　　[健の]　[　　ｐｒｏ　生まれた] 家]
　　ＮＰ　　i　　ＣＬ　　i

この分析では上の(27)に見るように「健」は初めから属格を受ける連体修飾語の位置にある。しかし同時に、「生まれた」の主語の起こる位置にゼロ代名詞（ｐｒｏ）を設定して、動詞の意味役割を担

う名詞が同じ節内に起こっている。更にこのゼロ代名詞は「健の」と同じ指標を持っているので「健の」が「生まれた」の経験者と解釈される。

以上、移動分析もゼロ代名詞分析も「の－名詞句」の文法的機能を修飾語としてとらえながら、かつ、動詞の意味役割をもつ名詞句として同じ節内あることを示している。しかし、これらの分析は問題をかかえていることを以下に簡略に 述べる(詳細はYamahashi (1995)参照)。

第一に、移動の分析に関して、この変形規則の適用は動機がなく、かつその規則が持つ制約に反する。前述したように、あくまでも最後の手段としての移動は、どんな格も与えられない名詞句にのみ適用される。従って、格の位置から別の格の位置への移動は禁止される。提案のように「健の生まれた家」の深層的な構造が(25)であるなら、「健」は元の位置にいれば自動的に主格の「が」が付与されるにもかかわらず、属格「の」を得る為に、連体修飾語の位置に動かなければならない。つまり「健」は、主格の位置から属格の位置へと動くことになり、移動の制約に抵触する。しかし、「健」が移動せず元の位置に残れば主格の「が」しか得ることができず、派生されるのは「健が」のみで「健の」は生成されない。移動に対するこの制約は、一つの名詞句が二つの格を持つ事を防ぐという意味でも理論上必要不可欠であり、「が／の交換」現象の為の理論的修正は容易ではない。

第二に、これは両方の提案に言える事だが、節内に音形を伴わない名詞句の設定をしている表層的な構造(26)、(27)が問題を引き起こす。何故なら、これらの構造は、下の例文(28)の持つ構造と同じ構造を意味するからである。

(28) [　　健の　[　　健が 生まれた]　家]
　　ＮＰ　　ＣＬ

(28)は、音形を伴わない主語（ｅ／ｐｒｏ）の位置に音形を伴う「健が」

が現れているが，(26)／(27)と構造的には 全く同じである。しかし、(28)は、「健の（所有する、あるいは、住む）家で、健が生まれた家」という意味を持つが、「健の生まれた家」の言葉それ自身には「健の家」の意味が含まれていない。つまり、「健の生まれた家」のS構造とされている(26)／(27)は、「健の生まれた家」とは違う意味を持つ文の構造を意味している。従って変形文法も、動詞の意味が節の構造を決定するという仮説を保ちつつ、かつ「が／の交換」のもつ意味と文法機能が一致しないという現象を解決することはできない。

5． 結論

本稿は、日本語の「が／の交換」の分析を通して、動詞の意味情報が節の構造を決定するという言語の普遍的仮説に疑問を投げかけた。具体的には、「の－名詞句」が「が－名詞句」同様、動詞の意味役割を担っているにもかかわらず、文法的には「が－名詞句」と異なり動詞と文法的関係がなく連体修飾語であること、つまり、動詞と同じ節に共起していないことを示した。また、この意味と文法機能の不一致を移動という変形規則やゼロ代名詞に委ねて、音形を伴わない名詞句を動詞と同じ節に想定することにも問題があることを示した。

世界中に何千とある言語の中のたった一つの言語にすぎない日本語の「が／の交換」現象だけをもって、言語の普遍性とされる仮説を否定することはできない。しかし、他の言語にもこのような現象はないのだろうか。そして、動詞の意味的特性と文／節の構造との関係は、どのようになっているのだろうか。今後の課題としたい。

参考文献

Chomsky,Noam(1981).Lectures on Government and Binding.Dordrecht: Foris.

————(1992). A Minimalist Program for Linguistic Theory.MIT Occasional Papers in Linguistics,MIT,Cambridge,MA.

Fukui,Naoki and Taisuke Nishigauchi(1992).“Head-Movement and Case
Marking in Japanese,” Journal of Japanese Linguistics,vol.14,pp. 1 — 35.

Handerson,Harold G (1948).Handbook of Japanese Grammar.Houghton ,New York.

井上 和子(1976).『変形文法と日本語』.大修館,東京.

牧野 誠一(1980).『繰り返しの文法ー日英語比較対照』.大修館,東京.

松下 大三郎(1930).『標準日本語口語法』.勉誠社,東京.

三原 健一(1994).『日本語の統語構造』.松柏社,東京.

Riemsdijk,Henk Van and Edwin Williams (1986).Introduction to the Theory of Grammar. MIT,Cambridge,MA

Sells,Peter(1986).Lectures on Contemporary Syntactic Theories：An Introdection to Government－Binding Theory,Generalized Phrase Structure Grammar,and Lexical－Functional Grammar.Center for the Study of Language and Information, Stanford University,CA.郡司・田窪・石川訳,『現代の文法理論』,産業図書,東京,1988.

Yamahashi,Sachiko (1988).Resolving the Problem of no in Japanese：An Analysis of Words.Dissertation,Universiry of Arizona,AZ.

————(1995).Arguments against Movement Accounts of ga-no Conversion in Japanese.North Carolina State University,NC.